

「教学IRの立場からジェネリックスキルの成長に関わっている活動を可視化する」

## データ収集とエビデンスベースの教育改善

### Today's Contents

- ①なぜデータ収集が必要か
- ②(教育)システムを改善することの難しさ

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

<http://smizok.net/>

E-mail [mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp](mailto:mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp)

# Contents

- ①なぜデータ収集が必要か
- ②(教育)システムを改善することの難しさ

# なぜデータ収集(調査)が必要か

## —IR(Institutional Research)の歴史から—

- IRの前史(1908-1943年):「調査の時代」(Tetlow, 1973)
- なぜに対する10の理由(Eells, 1937)
  - (1) 教育における科学的精神の発達
  - (2) ビジネスや産業で求められるようになっている効率性
  - (3) 社会調査の隆盛
  - (4) 高等教育の発展
  - (5) 複雑になる高等教育
  - (6) 高等教育の財政問題
  - (7) 高等教育への批判
  - (8) アク্রেディテーション機関の発達
  - (9) 教育調査が一般的になったことの影響
  - (10) 自己防衛

**参考** Eells, W. C. (1937). *Surveys of American higher education*. New York: Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching. (2013年Literary Licensing, Reprinted版)

# エビデンスベースであることの意義

4

## ① 実態を明らかにする (fact-finding)

- ・この歴史は米国IRの前史につながる
- ・日本でも、多くの大学では実態調査をおこなってきたが、どれだけ教育改善に資するものだったかは疑わしい
  - ☞ 学習成果(教育の質保証)に向けての実態調査ではなかった
  - ☞ お題 (Research Question) cf. 立命館大学の教学IR

参考 鳥居朋子 (2013). 質保証に向けた教学マネジメントにIRはどう貢献できるのか?—立命館大学における教学IRの開発経験から— 大学マネジメント 9(3), 2-7.



- ・狭い個人的経験から脱却する
- ・ゆがんだ実態把握を修正する

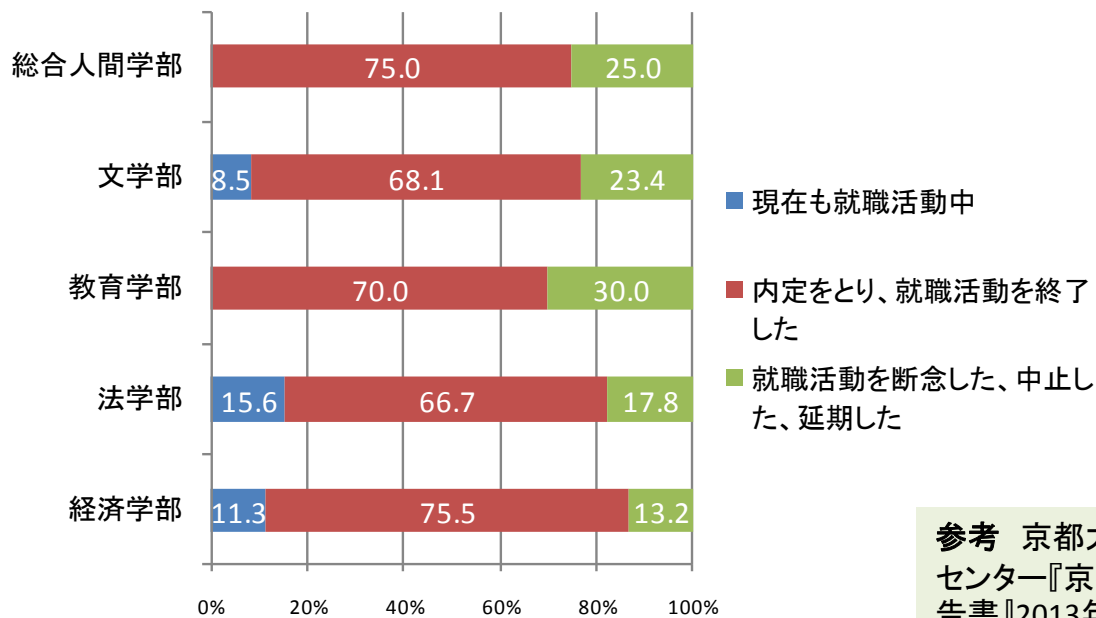
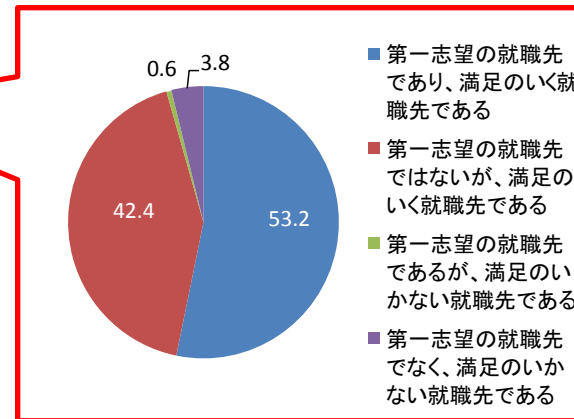
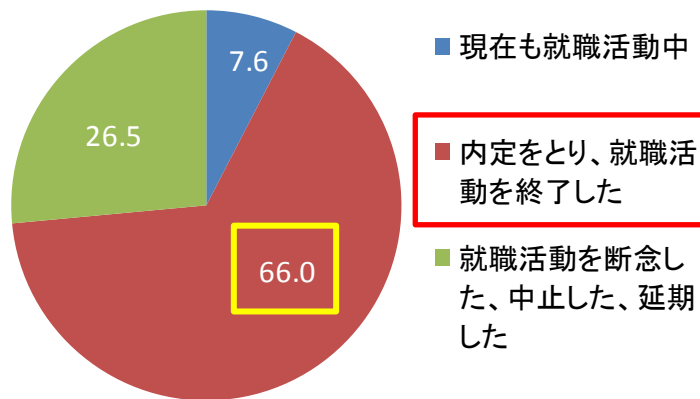


(例) 企業とのトランジション  
吉本圭一・矢野真和・濱中淳子  
中原淳/溝上(プロフィール参照)



### ・なぜに対する10の理由 (Eells, 1937)

- (1) 教育における科学的精神の発達
- (2) ビジネスや産業で求められるようになっている効率性
- (3) 社会調査の隆盛
- (4) 高等教育の発展
- (5) 複雑になる高等教育
- (6) 高等教育の財政問題
- (7) 高等教育への批判 ←
- (8) アク্রেディテーション機関の発達 ←
- (9) 教育調査が一般的になったことの影響
- (10) 自己防衛 ←



参考 京都大学FD研究検討委員会・高等教育研究開発推進センター『京都大学自学自習等学生の学習生活実態調査報告書』2013年3月

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/resource/2013jigaku.pdf>

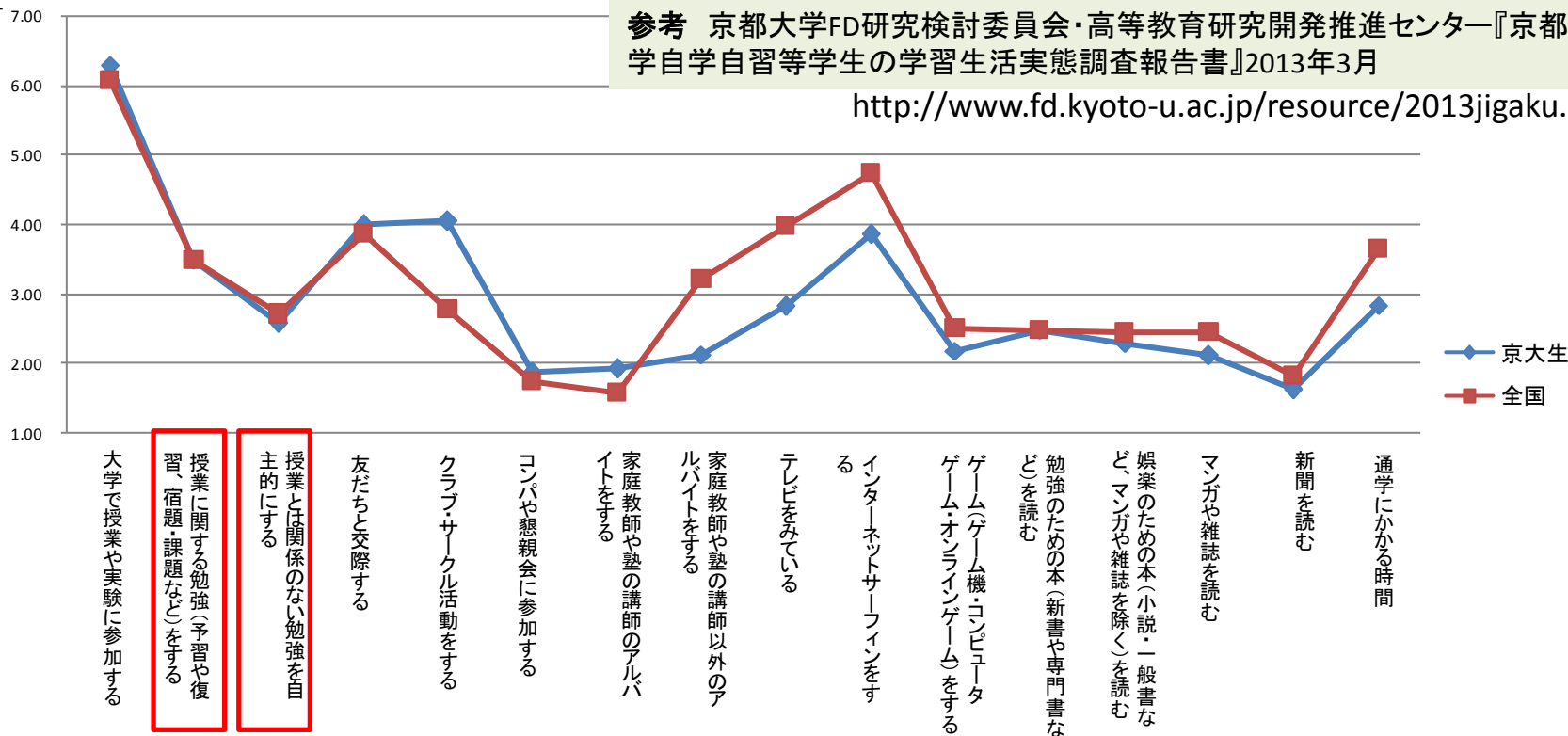
# ②大学・学部別の比較分析が可能

(8) 21時間以上

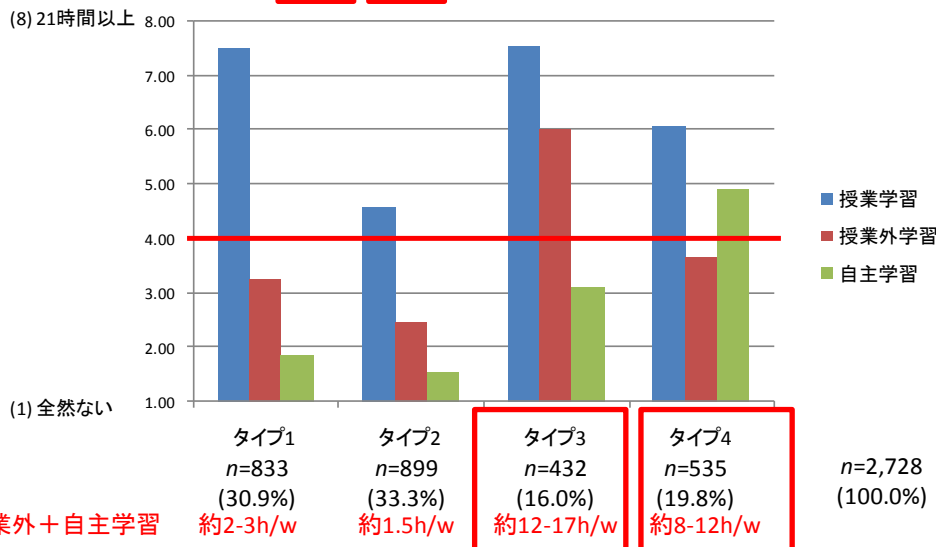
参考 京都大学FD研究検討委員会・高等教育研究開発推進センター『京都大学自学自習等学生の学習生活実態調査報告書』2013年3月

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/resource/2013jigaku.pdf>

(1) 全然ない



(8) 21時間以上

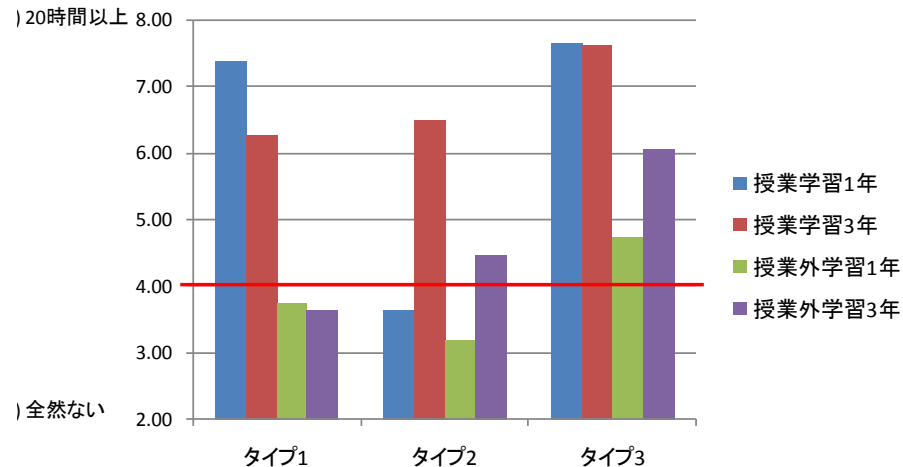
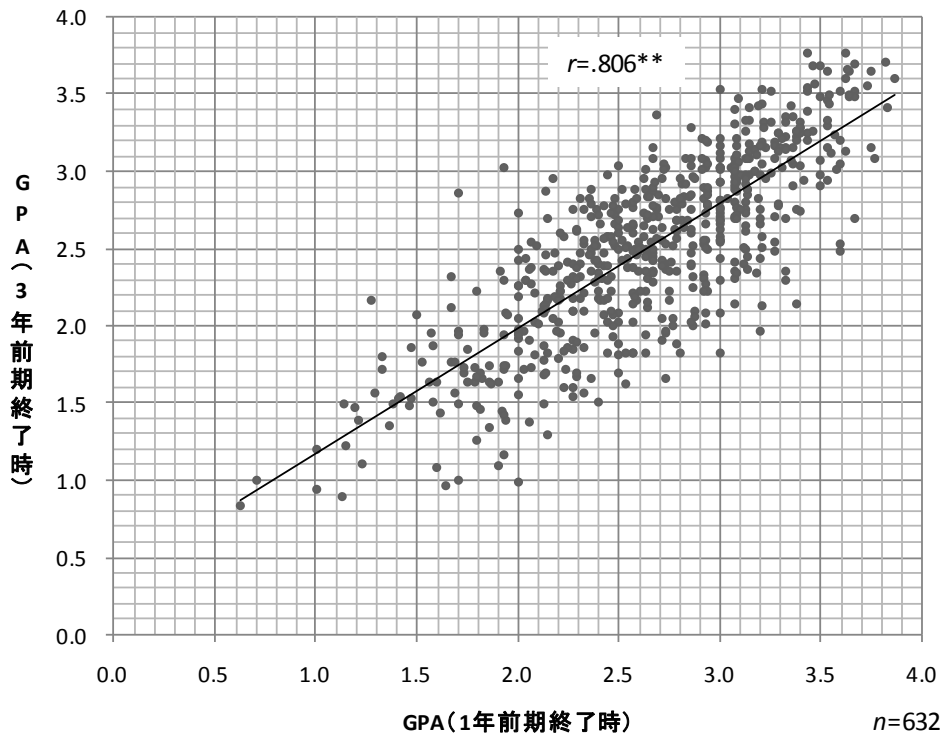


### ・なぜに対する10の理由 (Eells, 1937)

- (1) 教育における科学的精神の発達
- (2) ビジネスや産業で求められるようになっている効率性
- (3) 社会調査の隆盛
- (4) 高等教育の発展 ←
- (5) 複雑になる高等教育 ←
- (6) 高等教育の財政問題
- (7) 高等教育への批判
- (8) アクレディテーション機関の発達
- (9) 教育調査が一般的になったことの影響
- (10) 自己防衛

# ③ 関連分析(クロス集計・相関・構造分析等)

(\*大阪府立大学高等教育開発センターIR顧問)



	タイプ1	タイプ2	タイプ3	合計
工学部	166 (61.3)	29 (10.7)	76 (28.0)	271 (100.0)
生命環境科学部(獣医学科以外)	48 (78.7)	6 (9.8)	7 (11.5)	61 (100.0)
生命環境科学部(獣医学科)	7 (28.0)	5 (20.0)	13 (52.0)	25 (100.0)
理学部	40 (55.6)	12 (16.7)	20 (27.8)	72 (100.0)
経済学部	43 (79.6)	0 (0.0)	11 (20.4)	54 (100.0)
人間社会学部	49 (96.1)	0 (0.0)	2 (3.9)	51 (100.0)
看護学部	12 (57.1)	0 (0.0)	9 (42.9)	21 (100.0)
総合リハビリテーション学部	34 (63.0)	0 (0.0)	20 (37.0)	54 (100.0)
全体	399 (65.5)	52 (8.5)	158 (25.9)	609 (100.0)

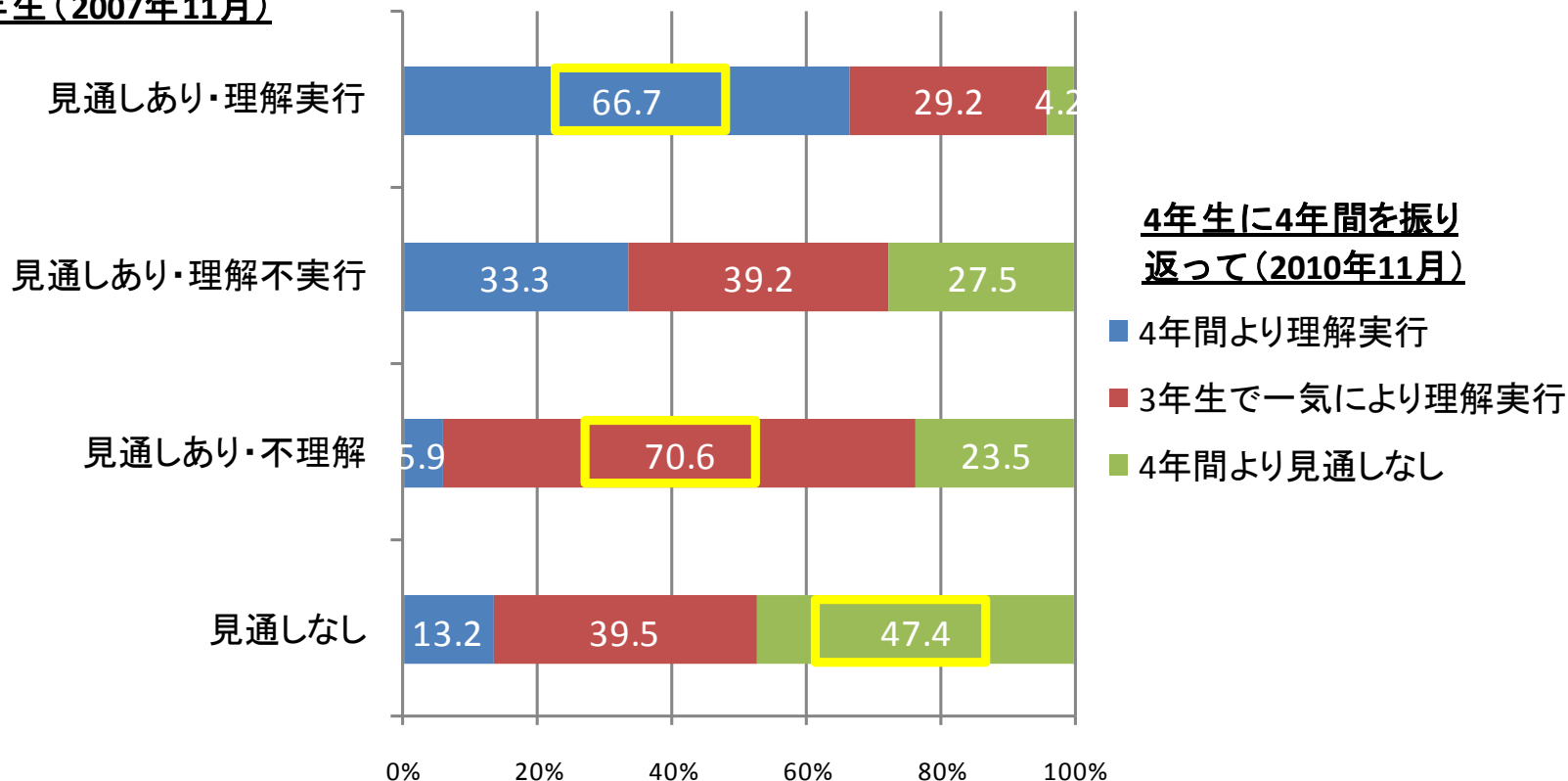
- ・初年次ゼミナール(2012年度～)への影響
- ・学習時間や学習行動等さまざまな変数とGPAとの関連のなさ
  - ☞「授業を欠席しない」「居眠りしない」とは相関が見られる
  - ☞GPAが学習目標に直結していない

### 参考

- ・溝上慎一「経験や勘からデータ重視へと教学改善を跳躍させるIR」(進研アド『Between』2013年10-11月号)
- ・中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百(編)(2013). 大学のIR Q&A 玉川大学出版部

# ◆「二つのライフ(キャリア意識)はなかなか変わらない」

1年生(2007年11月)



**Data Source** 京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会主催『大学生のキャリア意識調査2007追跡(2010年版)。2007年988名→2010年130名。分析では医療系を除外している。

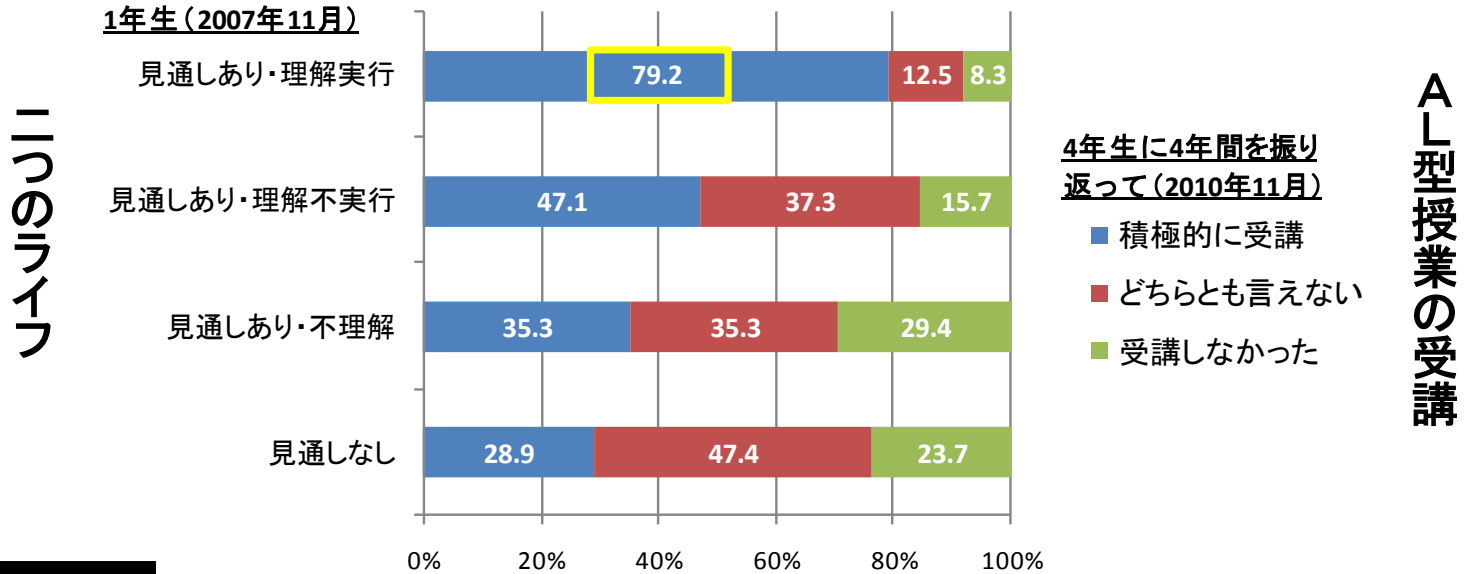
詳しくは<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/> を参照

**参考** 保田江美・溝上慎一(2014). 初期キャリア以降の探求—「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に 中原淳・溝上慎一編 活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション— 東京大学出版会 pp.139-173.



# ◆二つのライフ(キャリア意識)はアクティブラーニング型授業の受講にも影響を及ぼす」

Q. 入学時より振り返って、あなたはある問題を考えたり、発表したり、ディスカッションをしたりする参加型の授業や演習にどの程度参加してきましたか。



## 大阪府立大学の事例

3 キャリア意識の低い者は、就職の内定率が低い、大学院進学として先延ばし、AL型授業を受講しない、能力や知識の自己評価が低い(=キャリア教育と学習の接続)

**Data Source** 京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会主催『大学生のキャリア意識調査2007追跡(2010年版)。2007年988名→2010年130名。分析では医療系を除外している。詳しくは<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/> を参照

**参考** 保田江美・溝上慎一(2014). 初期キャリア以降の探求—「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に 中原淳・溝上慎一編 活躍する組織人の探究—大学から企業へのトランジション— 東京大学出版会 pp.139-173.

## ④どのような実態を明らかにするのかという検討自体が、教育の質保証の改善サイクルを創り出す

- ◆表向きは、調査票作成。しかし、実質は、
  - ・教育の質保証に向けて必要な活動の焦点化(自覚化)
    - ☞①実態調査
  - ・お題(Research Question)の作成
    - ☞②比較分析・③関連分析

例:

- ・就活・学習時間の実態(京都大学)
- ・GPAの1-3-4年生への変化(大阪府立大学)
- ・キャリア意識と学習(アクティブラーニングを含む)との関連

# 影響1. 新任教員教育セミナーでの研修項目(学習実態)(2010年)

(=初任者研修)

総長、教育担当理事等が在籍



ささやかな

# 影響2. 初年次特別セミナー「キャリア教育」(2010年～)

<文系(総人含む)学部> 平成26年4月5日(土) 於:百周年時計台記念館大ホール

対象学部	スケジュール	内容	講師
総人 教法	10:00~10:15	ご挨拶	理事(教育担当) 淡路 敏之
	10:15~10:45	学生生活のメンタルヘルスについて	カウンセリングルーム教授 杉原 保史
	10:45~11:15	京都大学で人権を考える	法学研究科教授 林 醇
	11:30~12:00	国際交流-京都大学でのチャンスと準備	国際交流推進機構長 森 純一
	12:00~12:30	キャリアを考えよう	高等教育研究開発推進センター准教授 満上 慎一
文 経	14:00~14:15	ご挨拶	理事(教育担当) 淡路 敏之
	14:15~14:45	学生生活のメンタルヘルスについて	カウンセリングルーム教授 杉原 保史
	14:45~15:15	京都大学で人権を考える	法学研究科教授 林 醇
	15:30~16:00	国際交流-京都大学でのチャンスと準備	国際交流推進機構長 森 純一
	16:00~16:30	キャリアを考えよう	高等教育研究開発推進センター准教授 満上 慎一

# 影響3. 大学機関別認証評価における課題解決のための全学WG委員(2013年)

授業外学習時間、キャリアデザインのデータ収集をおこなう

# Contents

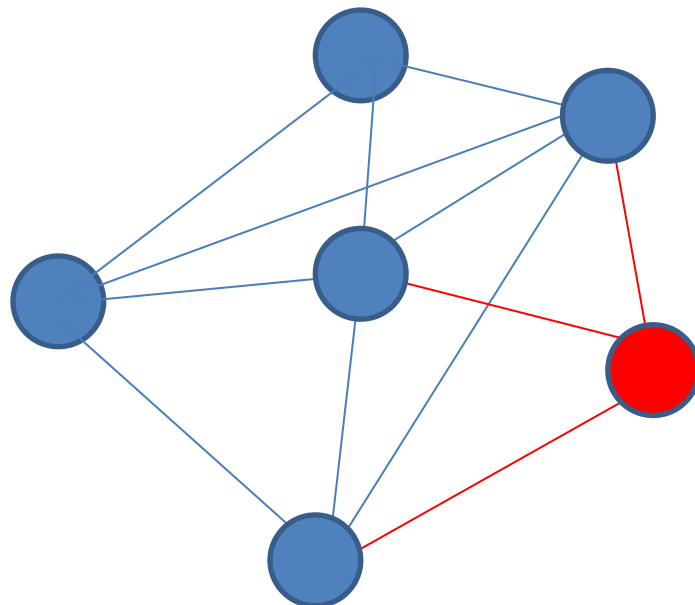
- ①なぜデータ収集が必要か
- ②(教育)システムを改善することの難しさ

# システム(全体)に新たな部分を加えることの意味をもっと知らねばならない

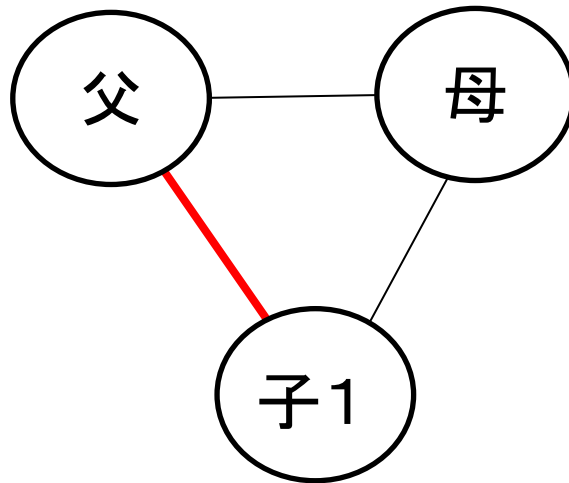
## 想定例:

- ・シラバスを導入する
- ・クリッカーを使用する
- ・成績評価を厳格におこなう
- ・ディスカッションを導入する
- ・15回授業をおこなう
- ・カリキュラムナンバーをつける
- ・基礎科目の授業を標準化する

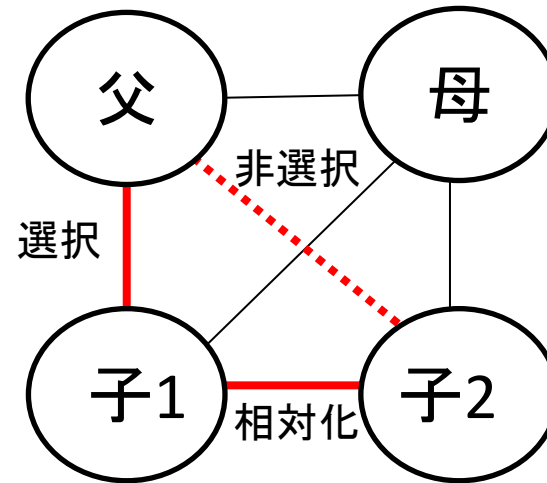
etc.



# 家族システムで考えてみる



家族1



家族2

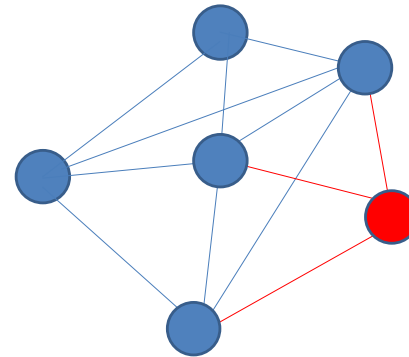
子供が1日増えるだけで、家族システムは  
かなり複雑になる

☞ システムの複雑化

## システム(全体)に新たな部分を加えることの意味をもっと知らねばならない

### 想定例:

- ・シラバスを導入する
  - ・クリッカーを使用する
  - ・成績評価を厳格におこなう
  - ・ディスカッションを導入する
  - ・15回授業をおこなう
  - ・カリキュラムナンバーをつける
  - ・基礎科目の授業を標準化する
- etc.



## 状況論的アプローチ

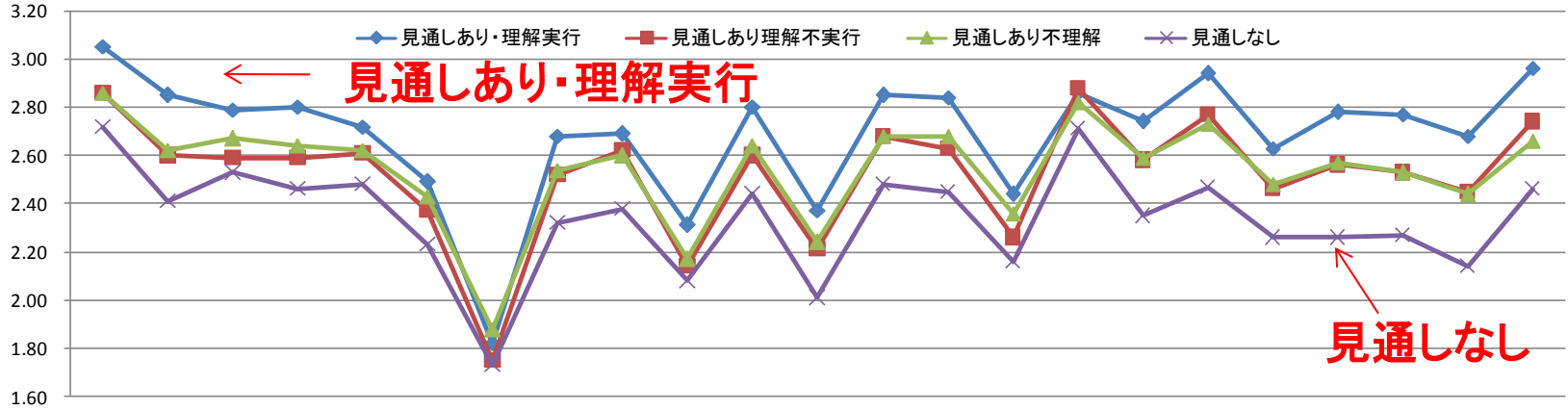
- ・鳥瞰図的視点から脱鳥瞰図的視点へ
- ・社会的相互作用
- ・システムを作動させるための状況判断・補完的作業

### 参考

- ・上野直樹 (1999). 仕事の中での学習－状況論的アプローチ－ 東京大学出版会
- ・上野直樹 (編) (2001). 状況のインターフェイス 金子書房

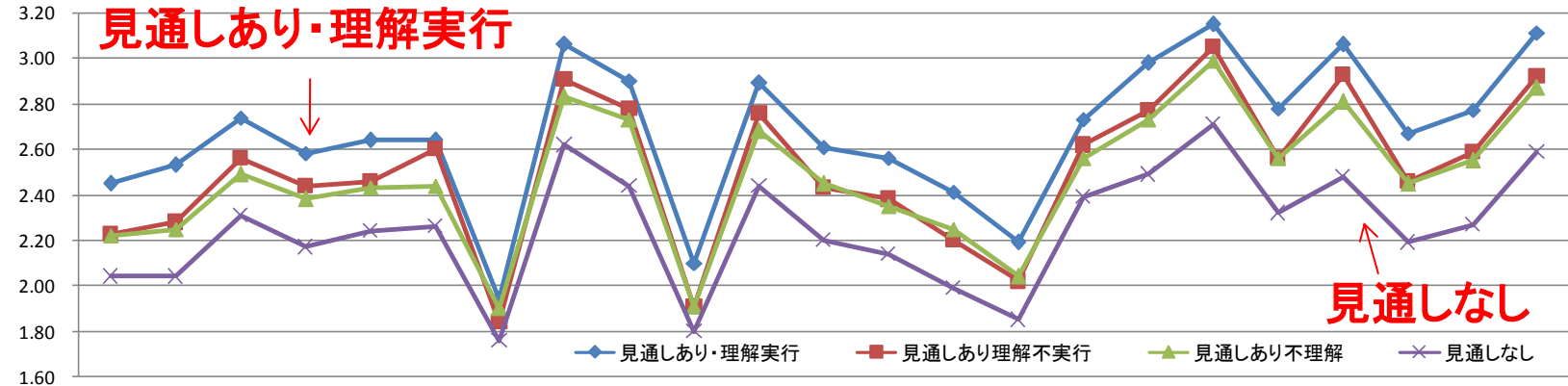
# 要素間の関連分析や(教育・授業)フローのストーリー作成

(4) かなり身についた



a. 授業で身につけた知識・能力

(4) かなり身についた



b. 授業外で身につけた知識・能力

(1) まったく身につかなかった

- 専門分野で研究するための基礎的な学力と技術
- 将来の職業に専門的知識を生かす応用力
- 専門外にわたる幅広い教養
- 分析を通しての批判的思考力
- 情報の管理能力と技術
- 市民性と倫理的責任感
- 起業家精神
- 対話の能力
- 日本語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力
- 外国語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力
- 問題解決能力
- リーダーシップ能力
- 文章表現能力
- プレゼンテーション能力
- 数理的な能力
- コンピュータ・インターネットの操作能力
- 時間を有効に利用する能力
- 他人との協調性
- 創造性
- チャレンジ精神
- 知的面での自信
- 競争心
- 力
- 忍耐強く継続して物事に取り組み



ご清聴有り難うございました

## Contents

- ①なぜデータ収集が必要か
- ②(教育)システムを改善することの難しさ

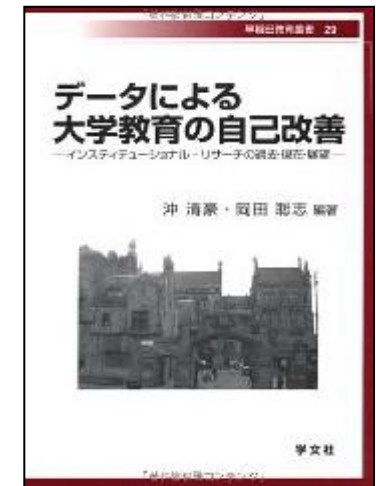
# IRの参考図書

・中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百 (編) (2013). 大学のIR Q&A 玉川大学出版部

・ハワード, R. D. (編) 大学評価・学位授与機構IR研究会 (訳) (2012). IR実践ハンドブックー大学の意思決定支援ー 玉川大学出版部

・Howard, R. D., McLaughlin, G. W., Knight, W. E. and Associates (2012). The handbook of institutional research. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

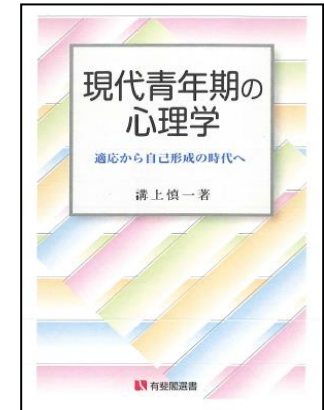
・沖清豪・岡田聡志 (編) (2011). データによる大学教育の自己改善ーインスティテューショナル・リサーチの過去・現在・展望ー 学文社



# 興味があればお読みください

## 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣選書

青年期の現代への変貌を歴史的・社会的概説しつつ、学習やキャリア意識(2つのライフ)が、大学生にとっていかに現代的な青年期課題になっているかを説明したもの。



## 溝上慎一・松下佳代(編) (2014). 高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育— ナカニシヤ出版

この10～15年、世界的に喫緊の課題となっている学校から仕事へのトランジションを、国際的に定義し・国際的な近年の動向を概説したもの(溝上慎一)。ほか「大学から仕事へのトランジションにおける<新しい能力>」(松下佳代)、「<移行>支援としてのキャリア教育」(児美川孝一郎)、「アイデンティティ資本モデル—後期近代への機能的適応」(ジェームズ・コテ)、「後期近代における<学校から仕事への移行>とアイデンティティ—「媒介的コミュニティ」の課題」(乾彰夫・児島功和)ほか。



# 講師プロフィール

1970年1月生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手・講師・准教授を経て、2014年より京都大学高等教育研究開発推進センター教授(大学院教育学研究科兼任)。京都大学博士(教育学)。



<http://smizok.net/>

日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board委員、“*International Conference on the Dialogical Self*” Scientific Committee委員。公益財団法人電通育英会大学生調査アドバイザー、大阪府立大学高等教育開発センターIR顧問ほか、高校のSSH運営指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と高等教育(大学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事へのトランジションなど)。著書に『自己形成の心理学－他者の森を駆け抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へ』(2010有斐閣選書、単著)、『大学生の学び・入門－大学での勉強は役に立つ！－』(2006有斐閣アルマ、単著)、『高校・大学から仕事へのトランジション－変容する能力・アイデンティティと教育－』(2014ナカニシヤ出版、編著)、『活躍する組織人の探究－大学から企業へのトランジション－』(2014東京大学出版会、編著)など多数。